認知症　そのままでいい　第1回

『恍惚の人』を現代の知見で読み直す

偏見を広めたベストセラー

認知症の人は何もわからず、困ったことばかりする。怒りっぽくて暴言を吐き、徘徊し、乱暴になり、糞尿を壁や畳に塗りたくる。さらには、この「困った病人」を介護する人は大変な労苦地獄のような苦しみを味わう。こんな認知症への見方が、当然のようにいまの社会にはまだまだ広がっている。マスメディアの取り上げ方もほとんど同じである。認知症という病気は、恥ずかしい大変な困った病気で、周囲に大変な面倒をかける。予防して認知症にならないようにしよう、チェックリストで早期発見して薬を飲んで止めないといけない。

病を得た人、障害をもった人の尊厳をないがしろにし、その人々の苦悩に一瞥することもないこのような認知症への見方、認知症観をいったい誰が作り上げたのであろうか。社会やメディアはふつう、どんな病に対しても、もう少し寛容でいたわりの目を持っているものだ。それが治らない死に至る病であってもである。ところが、認知症に対しては、なぜか容赦がない。そのような先入観を誰が与えてしまったのか。

その一つの答えは、１９７２年に発刊された有吉佐和子の小説『恍惚の人』である。

認知症（当時は痴呆）の主人公と家族を初めて本格的に描いたこの小説は、大きな話題を呼び、１９０万部の大ベストセラーとなった。この小説が、私たちの国の認知症への見方に決定的な影響を与えたのである。小説は、当時ほとんど話題になっていなかった高齢化の問題、認知症や介護の問題を先駆的に社会に提起したもので、その点には大きな意義があった。しかし一方、認知症の人の描き方は一方的なものだったといわざるを得ない。これは著者の責任とはいえない。社会全体が、高齢者の尊厳を認めるという意識をもっていない時代だった。

この小説を、現代の知見で読み直し、問題点を考えてみたい。

認知症の人は恍惚としていない

物忘れをし、息子のこともわからなくなり、意味不明な行動をする 80 歳代の主人公。徐々に暴言を吐き、徘徊し、ついには便を畳に塗りたくるようになる。仕事をもちながら、義父の介護をひとり負わされた嫁は、どうしていいかわからずにうろたえる。訳のわからぬ困った言動をするのが認知症だという描かれ方ばかりで、本人の心情や人格はほとんど顧みられていなかった。病気をもった「人」は描かれず、病気とその周囲で困る家族にしか焦点を当てていなかった。

「恍惚の人」というタイトルもまた、シニカルなゆがんだ見方を表している。「恍惚」とは、「大辞泉」（小学館）のデジタル版によれば、①物事に心を奪われてうっとりするさま

②意識がはっきりしないさま、とある。①は解説不要であろう。②は、文例にも挙げられている「将軍はすでに疲れ切っていた…精神も次第に恍惚となるほどだった」（島崎藤村の小説『夜明け前』）が典型的な使い方で、健常な人が疲労などで頭がはっきりしなくなることを表し、認知症を示したものではない。

③に「老人の、病的に頭がぼんやりしているさま」とあり、「小説『恍惚の人』で流行した」と付記されている。この本のベストセラーにより一般化した語義であるらしい。しかし、「ぼんやり」が意識がぼんやりしていることを示すのなら、間違いだ。大半の認知症の人は、記憶や見当識の誤りはあっても意識ははっきりしている。認知症の人を「頭がぼんやりしている」という理由づけで「恍惚」と呼ぶことは、大きな違和感を感じざるを得ない。

認知症を描いた小説になぜ著者が「恍惚」というタイトルをつけたか、はっきりとはわからない。ただ、そこ

に、認知症の人がなにもわからず、ぼんやりとして、自分の世界にうっとりしているだけ、という意味を含ませているとしたら、（当時は仕方なかったかもしれないが）まったく当たらず不適当である。

主人公の症状はむしろせん妄では

この小説にはもっと大きな問題がある。それは、作中に描かれた主人公の症状や行動がすべて認知症によるわけではない可能性が高いということである。

たしかに、主人公には認知症があったと思われる。しかし軽度であった。作品の前半で、急死した妻の葬式の場面があるが、主人公は息子や娘が誰だかわからないと言うものの、嫁と孫のことはよくわかり、妻が亡くなって葬式をしていることはしっかりと認識できている。まだらに人の見当識障害があるが、少なくとも、重度レベルの状態ではない。

敬老会館に昼間は通う（現代なら「デイサービス」であろう）ようになるが、仕事を終えた嫁が迎えに行った帰り道で、本人は「ここは爺婆ばかりだからいやだ」と気持ちを語っている。どこにいたかをすぐに忘れるような状態ではなく、記憶障害もそれほど重篤だとは思えない。

しばらくして梅雨の時期に、入浴中に溺れて危うく助かり、その後高熱が出て肺炎を起こす。4日間高熱が続いて、身体的な衰弱がうかがわれた。その後、「もしもし」と言う以外言葉が出なくなり、排泄もうまくいかずおむつも必要になった。残暑の季節、トイレで男性小便器をとり外して長時間抱えていたり、未明に便を畳に塗りすり込んでいたりした。そのたびに、嫁は抵抗する義父に苦労しながら対処した。しばらくして、徘徊で行方不明になった直後、義父は急死する。

発熱後のこれらの行動障害は、認知症の症状だったのか。ふだんの軽度認知症の状態からみて急に症状が悪化しており、ゆっくり進行するはずの認知症の症状とは考えられないのである。

せん妄の症状であった可能性が高いと思われる。せん妄は、器質性疾患や身体的問題によって生じる意識障害であり、しばしば夜間に増悪する。認知障害や幻覚・妄想を生じるが、認知症とは異なる一時的な病的状態で治癒可能である。この主人公の場合、肺炎がいまだ完全に治らない病的状態や、その後の身体衰弱、夏の気候による疲弊状態が原因になっていた可能性が十分にある。認知症の軽い症状に、せん妄の症状が重なってしまい、ひどい認知症のように見えたのである。

誤った診断により作られた見方

重大な問題は、物を壊す行為や弄便や徘徊を、認知症の症状だとして描いてしまった、少なくともそう受け取られるように描いてしまったことである。描写の中には医師も登場しているが、せん妄への言及はない。著者にも、せん妄として区別する意識はなかったであろうが、それを責めることはできない。認知症とせん妄の鑑別は、現代の医療のなかでも検討を要する重要な問題であり、たやすく区別できるものではない。

当時、認知症とせん妄の症状の区別は医学上もあいまいであったと思われる。しかし結果として、せん妄が認知症に重なってひどく見えていただけのものを、ひどい認知症だというイメージを与え、それを「恍惚の人」と命名してしまった。間違った認知症の捉え方で描かれた小説が、現代の認知症のイメージに大きな影響を与えている。この現状は悲しむべきことである。

小説で描かれた認知症は軽度だった。せん妄がそれをひどく見せていたにすぎなかった。もし主人公が適切な身体治療を受けて回復していれば、軽度認知症の状態にまで戻って、嫁の介護を受けつつ敬老会館に通所しながら生活していくことができたはずだ。

『恍惚の人』の認知症の見方は、その心情や人格を認めず、なにも分からず困ったことをする人という一面的なものだった。現代の社会とメディアは、知らず知らずその認知症観に影響されてしまっているが、元になった小説の認知症という診断自体に間違いが含まれていたのである。

上田　諭（うえだ　さとし）

日本医科大学医学部講師。
新聞記者から医師に転身し、精神科で高齢者中心に診療。
医師を含め認知症に関わる専門職は、家族など介護者だけでなく
本人を尊重すべきだとの姿勢で患者に寄り添う。

本論文は、メディカ出版「医療と介護 Next」に掲載されたものです。
そのため、一部の内容に執筆当時の情報がございます。